



狐のくれた金の首巻

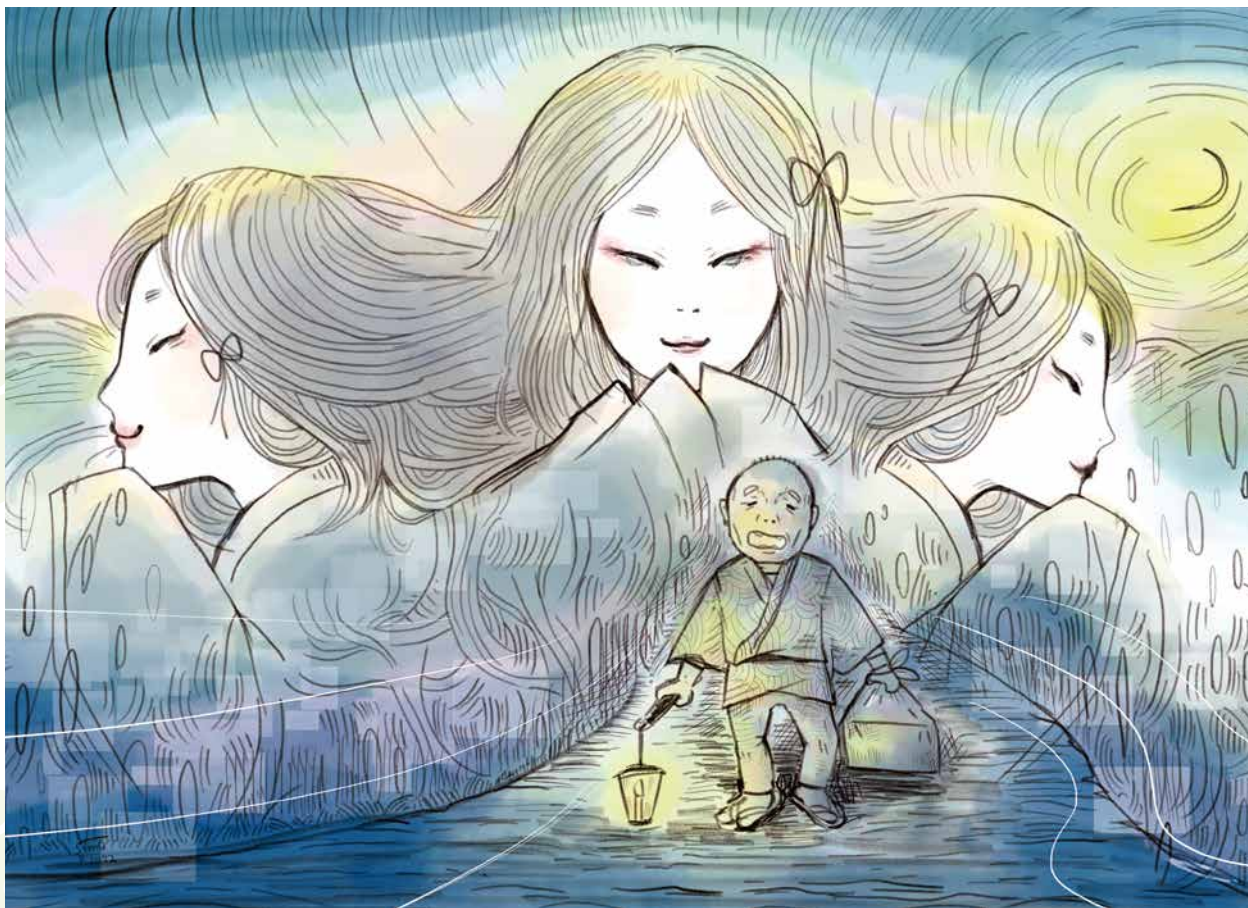
山王（羽根田）の西のはずれに狐塚という塚があります。昔はこの付近は山で大きな松の木や雑木がうっそうとおい茂り、昼間でもさみしい所でした。又、夕暮れ近くになるとコーン、コーンと狐の鳴き声が聞こえ、家のすぐ近くまで出てきては、いたずらをしていったそうです。私がまだ小さい頃、いろいろ端で祖父がよく次のような話をして聞かせてくれました。これはその中のひとつです。

ある秋の日のことです。羽根田に住む爺（じい）ちゃんが、青木の村祭りに呼ばれご馳走になり、帰り際にその家の嫁（よめ）御（ご）がご馳走を一杯詰めた重箱を持たせてくれて、落とすといけないからと、親切にも手首にしっかりと結びつけてくれました。

爺（じい）さんは飲んだ酒の酔いがまわり、ふらふらしながらたどたどしく歩いていきます。秋の日のことですからもうあたりはだんだんとすず暗くなってきました。と、狐塚のところまできた時です。向こうの方でどうやら若い娘らしいものが、3人寄って何やらヒソヒソとしゃべっている様子です。爺（じい）さんがよく見ますとどうしたというのでしょうか。見たこともないような、すごくきれいな振袖を着た娘達です。しかも3人とも瓜（うり）さね顔の凄い美人です。はて？何をしているのかなと思いつつ、近付いていって言いました。

「これ、おこじよ達。なにゆしちよつかの、はよかえらんと狐に化かさるつど」と言いますと、娘たち3人はニコニコしながら答えました。「爺（じい）ちゃん、青木の村祭りに呼ばれちいたつじやろ、みやげのごつそももちよりやるごたるが、いいにおいがぶんぶんするよ」と言うのです。爺（じい）さんは「よう知つちよるのー」と、びつくりしました。ところが1人の娘が前に進み出て言うのです。「私たちやね、となり村のもんじゃけど、高鍋（たかかき）にいつて今帰る途中じゃけん、ここまで来たら3人とも腹が減つてもう歩く元氣もねつよね、それでどうしようかと相談しよったとこよ、それでどんげじやるか、爺（じい）ちゃんのご馳走をくりやりゃんかしらん。そんなわりうちどんが

くさくさ





●高鍋町役場

持つちよる金の首巻をあげるが」と言うのです。爺さんは、すぐさま手を振りながら言いました。「いやいや、俺はそんなものはいらん。それにこりや神さんのごつそじゃかり、持って帰らにやならんのじゃ」と言いますと、娘たちは悲しそうな顔をして尚も頼むのです。「爺ちゃん、お願いしますよ。私達お腹がすいてもう歩けそうにもないのです。この首巻は金ですし、爺ちゃんとの婆ちゃんや娘さんがとてもよろこびますよ」と言うのです。爺さんはそれを聞くとかわいそうになり、首巻もなんだかピカリピカリと輝いているみたいでその気になりました。また、だいぶん酒を飲んでいたと見えてよろよろしながら言いました。「よしよし、お前達がそういいうなら、ごつそとかえちゃるわい」と言って娘達の方を見ますと、手首にゆわえていた重箱はいつの間にか娘が持っていました。それに手首と太ものあたりが、なんだかひりひりと痛むのですが、なにしろ酔っていますので、すぐに忘れてしまいました。気がつくとも娘達はもう向こうの方を歩いていきますし、自分の首にまいた金の首巻がとても気に入りました。大変いい気分になって、わが家をさして意気揚々と帰っていったのです。

やがて家にたどりついた爺さんは、戸口の戸をがらりと開けるなり「おい、婆さん今帰ったぞ。今日はいいもんをもちきたぞ。早よ来て見よ」と言いますと、婆さんは奥の方にいましたが、爺さんが余りうるさく言うのでいってみました。爺さんは婆さんを見るなり、首巻を広げて見せながら言いました。「こん首巻きや山王ん狐塚んとこで、どっかん娘がおち、ごつそとかえちくりと言



ろが」と、得意になって見せるのです。婆さんは、どれどれと言いながらそばに寄ってみますと、金の首巻どころか、首に巻きつけているのは爺さんがいつも腰につけている「へこ」ではありませんか。婆さんはあきれて言いました。「爺さん、おまやなにをとぼけちよつとのよ。こりやおまえん「へこ」じゃねの」と言いますが、何度言っても聞かせても聞き入れません。婆さんは困り果てて奥にいる息子を呼んでわけを話しますと、息子も「じさん、じさん、おまやどしたつものよ。汚ねじゃねの、早よ首からはずさんの」と何度も叱るように言いますが、爺さんはどうしても聞き入れず、金の首巻をだきしめたまま床にもぐって寝てしまいました。

次の日の朝です。目が覚めた爺さんは、手に自分の「へこ」をしっかりとにぎりしめているのに気がつきました。おかしいなと思ってよく考えてみると、夕べ祭りに帰るとき、どこかの娘から金の首巻をもらったことを思い出しました。さては、狐からだまされたなど、くやしがりしましたが、もう後の祭りです。それに手首と太ものところがひりひりと痛むのです。よく見ると何かの爪痕が一杯ついているのです。

娘に化けた狐どもが、爺さんのご馳走とふんどしを取る時にひっかいた爪痕だったのかも知れません。

